

【書評】

## 浜田久美子著 『日本史を学ぶための図書館活用術』

### 辞典・史料・データベース

久住真也

本書に出版元が付した帯には、「大学のレポート作成に 日本史の学び直しに 図書館のレファレンスに 必備の手引き」とある。これを見ると本書が単なる日本史の初学者向けの本では無いことが想像される。一方、タイトルである「図書館活用術」から、図書館の利用方法の詳細が分かる本だとイメージすると、予想が外れることになるだろう。

まず、目次である。第一章はレポートの作成方法、第二章は日本史の辞典（日本史辞典、人名辞典、地名辞典、年表など）の解説や活用方法、第三章はデータベースの活用方法、第四章は「史料を読み解く」とあつて漢和辞典、国語辞典、古語辞典、古文書用語辞典、くずし字辞

典、史料の注釈書と現代語訳などについて解説する。最後の第五章は、通史や地域史を知るための書籍紹介という構成である。第一章のレポート作成方法は、これに沿ってレポートが作成できれば、かなり高いレベルのものが期待できそうであり、卒業論文を執筆する基礎としても有益である。そのための辞典やデータベースについての解説が、第二章以下において展開されていくというのが、本書の流れである。

著者は日本古代史の研究者でもあるため、本書が取り上げるのは日本古代・中世史に関連する書籍や情報が中心となるが、目次の詳細を一覧すれば分かるように、それ以外の時代に関心を持つ人々にも有益な内容で、応用

がきく事柄が多い。ちなみに、評者は日本近世・近代史を専門とするが、目次に見える辞典類や年表、史料集は、馴染み深いものや、一度は触れたことがあるもの、また名称だけは知っているものが多い。また、データベースに通じていると言えない人々には、きちんとデータベースについて勉強する機会ともなろう。まさに、冒頭で紹介した帯にある「日本史の学び直しに」に最適である。

一

以下では、本書の特徴的な点を列挙しつつ、若干の論評を加えたい。

まず、①辞典や文献解題を中心とするこの手の本では珍しく、協力者はいるものの、著者一人がすべて執筆しているという点である。すでに見たように本書の内容は大きくみると、(ア)日本史に関わる辞典類の解説、(イ)データベースの説明、(ウ)漢和辞典・国語辞典、その他の解説からなるが、これらを複数人による分担執筆でなく、一人で執筆することは、一般に専門分野が細かく

分かれている日本史研究者の状況を考えれば、特筆すべきことに思われる。

本書のような、廉価でハンディな類書で見ると、今評者の手元に、本書と同じ出版元である吉川弘文館が平成四(一九九二)年に刊行した、中尾堯・村上直・三上昭美編『日本史論文の書き方 レポートから卒業論文まで』がある。その中には、「論文作成便利帳」として、基本的な参考文献や史料集、編纂物、辞典を紹介した部分がある。つまり、上記の(ア)(ウ)である。しかし、それに加えて、本書のように、現在研究上欠かすことのできない(イ)も載せたものは、管見の限り思いつかない。また、(ア)(ウ)についても、右の本と比較すると本書が扱う辞典や文献の数は厳選されており、その詳しい解説が加えられている。さらに、右の本では、辞典類は一九九〇年二月までに刊行されたものを対象としており、それ以後現在までをカバーしている本書の価値は高い。

②辞典類について、编者や出版元、刊行年などの基本情報や特徴が記されるのは当然としても、他には見られ

ない（と思われる）情報を付加している点である。例えば、「刊行時の価格」という欄を設け、同時期の他の辞典類の価格と比較しているが、そのような例は他にあるのだろうか。また、「歴史」欄を設けて、辞書刊行にいたる経緯や印刷技術の特徴、出版後の発行部数まで記しているのも注目される。はつきり言えば、これらの情報は無くても辞典を利用するのに何らさしつかえは無い。しかし、それがあることによつて、日本史分野の辞典類が持った文化的な価値というものが何となく推測でき、その辞典の「歴史」を知ること、辞典がいかかに利用され、どのように評価されてきたかが分かる。先人の営みを継承する学術研究の重要性を認識するうえでも有益である。

③本書が読み物としても優れている点である。例を挙げよう。本書は第二章において、地名辞典を取り上げるが、よく知られる『角川日本地名大辞典』と平凡社の『日本歴史地名大系』について、刊行当初、角川書店創立者の角川源義の「源」と平凡社の「平」をとつて、「地名辞典の源平合戦」と話題になったことを紹介して

いる（七二頁）。このようなさりげないエピソードが、この手の本にありがちな無味乾燥な内容に、読み物としての面白さを加えている。「源平合戦」を念頭に、改めてこれらの辞典を手に取りれば、何となく新鮮な気分になるだろう。また、辞典の説明の合間に、「コラム」が①～⑩まで設けられていることや、研究書の体裁に則つて注記が付されているのも、類書には無い特徴である。このような内容構成の着想をどこから得たのか、著者に聞いてみたいものである。

④著者が長く国会図書館のレファレンス業務に携わつてきた経験から来ると思われる、心憎い配慮が随所になされている点である。例えば、平凡社刊行の『日本史大事典』についての解説中（三〇～三一頁）、「豆知識」という欄がある。そこで、同書の第一～第六巻までの巻頭にあるテーマ別カラー図版の存在に言及し、授業や図書館のレファレンスでの活用に供するために、巻末に一覧表を付している（一六六頁の参考資料1）。辞典の図版は、意外と見落とされやすいが大変有益なものである。評者もときどき『国史大辞典』を開いていると意外な図

版に出会い、しばしば見入ってしまうことがある。これらがリスト化されていれば何とも便利なものだろう。辞典が電子化されると、図版は省かれ易いことを考えると、紙媒体の辞典の価値を再確認する機会になる。

また、「日本史辞典の王様」と著者が評する『国史大辞典』の「チルドレン」（前者から抽出した項目と新規項目からなるテーマ別辞書）についての解説も行き届いている。著者は詳細な解説に加え、コラムと一覧表を付している（二七―二九頁）。そこで、「チルドレン」に分類された辞典に新たに追記された文言や記述を紹介するなど、研究者にとって必須の情報を提供している。さらに、各人名辞典の収録年代を一覧表にして情報提供するなどの気配りは（五一頁）、著者のレファレンス経験を抜きには考えられないだろう。

⑤ ジャパンナレッジや、その他のデータベースの効用と問題点を的確に説いている点である。ジャパンナレッジについて言うと、評者が利用始めたのは遅く、最近のコロナ禍のオンライン授業においてであった。学生もこれを利用することによって、ある程度の内容のレポー

トが作成できるようになり、大変便利であることを認識したが、元となる紙媒体との相違や、使用するうえで踏まえておくべき点については、十分に知らないままという状態であった。

例えば著者は、先の『角川日本地名大辞典』の各巻が「総説」「地名編」「地誌編」「資料編」からなるのに、ジャパンナレッジに収録されているのは「地名編」だけであるという点を指摘しているが（七七頁）、評者はうかつにもそのことを知らなかった。また、平凡社の『日本歴史地名大系』については、ジャパンナレッジによって検索の幅が広がったが、ピンポイントで地名が検索できることから、各地名の相互連関への認識が失われがちになることに注意を促している点なども重要だろう（八〇頁）。

以上の点を考えると、机の前に座って、パソコンを操作するだけで事が足りるとは到底言えない。また、ジャパンナレッジからの引用の場合は、その旨を明記しなくてはならないとする理由もよく理解できる。

この他にも、本書は多様なデータベースについての最

新の知識を提供している。例えば、雑誌論文を検索するうえで誰もが利用するようになった、CINii:Articles（サイニー）などは、評者も何となく使い始め、学生にも利用するように言っているが、その使用法について分かっているように知らないことも多い。もちろん、「習うより慣れよ」で利用しながらマスターできれば、それで良いという考えもあるが、最初に知っているに超したことはない。また前述のように、レポートや論文などに出版を記す際に、ジャパンナレッジからの引用であることを明記しなければならないのと異なり、ネットからの論文引用に際しては、「機関リポジトリ名」を記すのではなく、もとの雑誌名・巻号・刊行年を記すべきとする理由が、合理的に説明されている（一〇三頁）。

近年、大学でも学生がレポート作成にあたり、ネット上で公開された論文や情報に依拠する機会が増えていく。その際、出典表記の方法はまちまちで、またなぜそのような表記にしなければならないのか理解できていない場合が多い。これは学生だけの責任ではなく、指導する教員側の認識も問われていると言ってよい。評者が知

らないだけで、実はすでに共通した「ガイドライン」のようなものがあるのだろうか。もし、仮にあったとしても、それが「常識」にまで高められているとは到底思えない。書籍の電子化の流れやデータベースに依拠する度合は、今後進行することはあっても後退することはない。便利であることが当たり前になるなか、今後は本書が示した内容について賛否両論の観点から議論し、新たな「常識」を作り上げていく必要があるのではないだろうか。

## 二

最後に本書全体を通じて考えたことを記したい。気になったのはタイトルである。率直に言えば、タイトルと本書の内容には齟齬があるように思われる。タイトルは「図書館活用術」よりも、「辞典活用術」の方が相応しいという印象を受けた。なぜ「図書館活用術」としたのか。著者の意図するところを推し量ると、ネットでは活用できない日本史の辞典類について説くことにより、結果として図書館に人々の足を向けさせようという狙いか

ら、つまり最終的な着地点として「図書館活用術」としてと解釈できる。著者は本書とは別のところで、日本史の史料を読むためには、漢和辞典やくずし字辞典などがあれば読めるわけではなく、総合的に意味を理解するために多くの史料や論文を読むべく図書館を使わなければならないと説いている（「改行のないレポート―『日本史を学ぶための図書館活用術』への想い―」『本郷』一四七、二〇二〇年五月、一六頁）。

それは全くもって正しいだろう。しかしそれでも、本書が多くのページを割くデータベースは、図書館に行かなくても自宅でもアクセス可能ではないか？という疑問も生じるだろう。この点についての著者の回答は本書の中にある。

国会図書館に長く勤務した著者は、人文系のレファレンスを担当した際のことを振り返り、「オンラインデータベースや電子化された書籍を利用しても、紙の本を見ずにレファレンスを終わらすことはできなかった」と述べている（三頁）。これは高度な職業的経験に裏打ちされた見解であり、それを踏まえての「図書館活用術」

着地点なのだろうと推測する。最大の情報集積地はやはり図書館だというのが著者の認識なのである。図書館を活用しなくてはならないというのは、著者や評者の世代にとつては改めて説くまでもない常識である。しかし、時は流れ、その常識が揺らいでいることへの憂慮が、本書のタイトルに現れていると見ることもできよう。ネットが力を持つ今だからこそ、変わってはならない「常識」を説く意味がある。

現在コロナ禍にあつて、学生も教員も等しく図書館利用には大きな制限を受けている。過剰との印象も拭えない利用制限を前に、「図書館活用術」を説く本書の意義は大きいというべきだろう。その意味で図書館の仕事に携わる人々にも是非読んで欲しい内容である。確かに、オンライン授業の経験を通じて、ウェブ上の様々なコンテンツが有用なことは評者も分かったが、それで十分だと学生に勘違いして欲しくないと思う。便利なものが必要を満たすとは限らないのである。歴史研究はそれほど甘くない。

また、本書は、初学者のみならず、現役で研究・教育

に携わる人々にとつても、辞典についての再発見をもたらすものであることは間違いないように思う。評者の学生時代は、辞典や文献の使用法などは、「何となく」マスターしたり、先輩からの「口コミ」で教わつたものであり、『大漢和辞典』などの引き方は誰も教えてくれないのが普通であつた。見よう見まねで何となく使えるようになった部分も多く、それゆえに、基本的な情報を見逃していたり、知らなかつたりする落とし穴がある。場合によつては、無意識に使用上の誤りを犯しているかもしれない。「再講習」の良い機会だと思われる。

最後に、特徴の②でも挙げたように、著者による辞典の「歴史」や「コラム」を読むと、本書が、辞典編纂という大変な仕事に従事した先人への敬意に貫かれているとの印象を持つ。現在の日本史研究の土台が、多くの先達によつて築かれてきたことを、学生には本書を読むことで是非知ってもらいたいと思う。その意味でも、本書は単なる文献案内ではない。研究者としての著者の視点に貫かれた研究書なのである。

以上、誤解や的外れな点があればご海容願いたい。史

学を志す多くの学生諸君が本書を手取ることを願つてやまない。

(二〇二〇年三月刊 吉川弘文館)

一七五頁 一八〇〇円＋税)